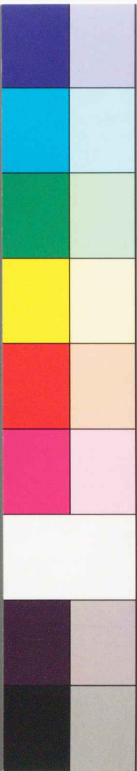


Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM, Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



各務野の人物往来

〜古代から近代〜

中山道鴨侶宿ボランティアガイドの会

伊能忠敬



皇女和宮



松尾芭蕉





はじめに

この冊子は、平成二十五年四月から平成二十八年三月まで、「中日各務原市民ニュース」(月二回発行)へ、私たちが中山道鶴沼宿ボランティアガイドの会が投稿した記事と写真をまとめたものです。

「訪ねてみよう中山道鶴沼宿・各務原の人物往来く古代から近代」と題して、各務原市出身の人に限らず武将や産業・文化等の功労者、中山道を旅した人まで幅広く紹介しています。なかには「こんな人もゆかりがあったのか?」と思われる人々も取り上げています。

今振り返ってみますと、「果たして七十人余りの人物を選定できるのか」といった心配もありました。そんな中で会員全員が分担して、資料収集から執筆まで苦勞した事が思い出されます。

今回これをまとめたのは、貴重な資料の散逸を防ぐとともに会活動の足跡を残し、また今後のガイド活動で話の種になればと考えた次第です。
ご活用を願っています。

各務原をめぐるガイドに 風光る

令和元年六月

各務野の人物往来〜古代から近代〜 もくじ

1	村国男依と三つの村国郷	19	市川百十郎	37	黒小僧次郎吉	55	土井武夫
2	蘇我倉山田石川麻呂	20	福沢桃介	38	土岐賴益	56	各務右近将常久
3	護命	21	長塚 節	39	横山忠三郎	57	大垣城鉄門と戸田家
4	安積氏	22	大谷刑部吉繼	40	木下謙吉郎	58	佐々木吉兵衛
5	一条兼良と鶴沼	23	吉田松隆	41	成瀬正肥	59	水田南政と六軒・廿軒
6	前野将衛門	24	鏡右衛門尉久綱	42	川上貞叙	60	佐良木尚頼
7	大沢次郎左衛門正秀	25	各牟勝	43	深富英泉	61	郷土の詩「小島三郎監学博士
8	伊木清兵衛忠次と藤吉郎	26	万里軍九	44	片原益軒	62	歌川広重
9	河村惣六	27	円空さんと各務原	45	黒田信長	63	八百比丘尼
10	旗本 坪内利定	28	山岡鉄太郎	46	榎田信長	64	蓮如上人
11	徳山氏	29	猫尾提と龜姫	47	榎聖 松尾芭蕉	65	三井弥太郎(三井山城主)
12	伊能忠敏	30	長縄八左衛門	48	岡田将監	66	竹腰山城守
13	田宮如雲とたみやみぞ	31	春日局	49	養 氏	67	純仲全親
14	播隆上人と各務野	32	岡田只治	50	高藤利水	68	梅田吉三郎
15	武田耕雲斎	33	堀田正睦と鶴沼宿	51	東陽英朝	69	若き日の武藤嘉門
16	赤鯉隊 相楽綾三	34	源 重之	52	人見清蔵と八幡山城	70	徳川治宝
17	永井肥前守尚服	35	御石屋藤半右衛門	53	多治見修理と孝姫	71	鶴沼宿の各家の系譜
18	はだか武兵衛	36	弥次郎兵衛と喜多八	54	和 宮	72	四月から新シリーズ

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来〜古代から近代〜〉



①村国男依と三つの村国郷
むなくにのおより

村国座の幕に描かれた男依の勇姿

七世紀後半、各務原市東部は三野国各牟評(かむこうり)村国の里と言われていた。それはやがて美濃国各務郡村国郷と変わる。言うまでもなく壬申の乱で大海人皇子の腹心として軍を指揮し、勝利を導いた村国男依の出身地である。

江南市村久野にも村国郷があった。男依の勢力範囲が木曾川を挟んだ対岸まで及んでいたことをうかがわせる。そして奈良県大和郡山田市に三つ目の村国郷があった。ここは男依と子孫が中央へ進出した折の本拠地と想定される。一方、村国真墨田神社(鶴沼山崎町)、村国神社(各務おかせ町)は共に男依を祭神とし、村国神社境内には村国座がある。

ここでこの秋、男依歌舞伎が上演される。市制施行五十周年の節目にゆかりの場所での歌舞伎。各務原の黎明(れいめい)期に傑出した足跡を残した英雄に思いをはせながら開演を待つことにしよう。

訪ねてみよう中山道鵜沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鵜沼宿ボランティアガイド

③ 護命

蘇原寺島町の山田寺跡に護命の石碑がある。護命は、天平勝宝二年(七五〇)、各務郡に生まれた僧である。彼は、わずか十歳で故郷を離れ、奈良の元興寺で修行を重ねた。その後の活躍は目覚ましく、法相教学を大成すると、僧正という地位に登り詰めた。護命は、真言宗の空海と親父が深かったが、天台宗の最澄とは大乗戒壇設立構想について激しく対立した。論争

の結果、護命は破れ、大僧都を辞職する決意をした。直後の行動を「純日本後紀」は、こう記す。然り、而して古京の山田寺に屏居すと。文面のまま読めば、古京とは奈良の都である。もし、「故郷」の意味であったとすれば、護命は各務郡の山田寺に隠居したことになる。いずれにせよ、護命は元興寺小塔院で亡くなった。承和元年(八三四)享年八十五歳であった。

訪ねてみよう中山道鵜沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鵜沼宿ボランティアガイド

② 蘇我倉山田石川麻呂

蘇原古市場町にある加佐美神社の御祭神の一座に蘇我倉山田石川麻呂が祭られている。蘇我倉山田石川麻呂は蘇我一族で、倉をつかさどる蘇我倉と出身地の地名、中和山田と河内石川を名字とし、名前は麻呂である。蘇我本宗家は、蘇我稲目―馬子―蝦夷―入鹿と四代にわたり権勢を振い、これに危機感を抱いた中大兄皇子(天智天皇)は蘇我氏を断つて、石川麻呂の娘を相次いできさきと

蘇原寺島町にある山田寺は、石川麻呂によって創建されたという伝承がある。また、宮塚と呼ばれる彼の墓と伝えられる小山(II)写真も存在する。この蘇原の地になぜこのように石川麻呂の伝承が多いのだろう。

し、彼を味方にしてクレーター(六四五年大化改新)を成功させた。その後、石大臣となったが、わずか四年後には謀反の罪に問われ、飛鳥の山田寺で自害し果てた。

この蘇原寺島町にある山田寺は、石川麻呂によって創建されたという伝承がある。また、宮塚と呼ばれる彼の墓と伝えられる小山(II)写真も存在する。この蘇原の地になぜこのように石川麻呂の伝承が多いのだろう。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶴沼宿ボランティアガイド

⑦ 大沢次郎 左衛門正秀

戦国時代の武将 青藤山城守道三の配下の人で宇留間(鶴沼)城主であった。鶴沼の虎といわれたほどの猛将だったと伝えられている。美濃国との国境に近い近江国の土豪出身である。

天文二十三年(一五五三)閏一月二日の夜、斎藤道三の命令で、当時織田側であった犬山城の山城である宇留間城の王、生駒道寿(可児市土田)の出身から父親の相宗守正信とともに乗っ取りに成功し功

賞として七千石ほど知行し宇留間城に入った。しかし織田信長の美濃攻略の水禄七年(一五六四)に犬山城を、さらに宇留間城も攻められて木下藤吉郎の調略によりやむなく藤吉郎の配下になったとも、後には浪人になったともいわれているが諸説あり不明である。食うか食われるかの戦国時代、本曾川べりの小さな城山(II写真)でどんな思いで川の流れや時代の流れを見ていたのであろうか。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶴沼宿ボランティアガイド

⑥ 前野将衛門

前野将衛門は戦国時代木曾川の川並衆であった。蜂須賀小六とは兄弟分として活躍していた。彼らは、尾張の大財閥生駒家の水運の仕事をしていて、盗賊から船を守るため、早くから鉄砲を使用していた。もともとは野武士であったが、戦の腕は確かで、加担する側に勝利をもたらすといわれるほどであった。彼らは、豊臣秀吉が織田信長に仕えたところからの最古参の家臣であった。墨俣城の改築

城、賤ヶ岳の戦いにおける小合城の夜討ちなど、秀吉軍には常に前野の姿ありと言われたほどであった。将衛門は、三千石の知行を得、秀吉の重臣となった。その後も武功を上げ、豊臣秀次付きの家老になった。しかし、秀次が謀反の罪で切腹を命じられると、将衛門も自害を命じられた。戦国という歴史のうねりの中で、野武士から関白の家老にまでなった波瀾(らん)万丈の生きざまであった。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑨ 河村惣六



惣六の意図は何だったのかと思っ
 天正十二年（一五八四）村国皇田神社（以下社殿）を現在地に遷座させたのが村の有力者の河村惣六である。遷座の理由は謎であり、社殿に関して調べ、興味深いことが分かった。神社内に古墳があると言われること、伊木山を北から眺めると仏がおむけに寝ているように見え、別名小仏山、そのへソ、現地の〇地志と社殿、金細塚古墳が一直線上

に並んでいるのである。不思議なことに伊木のへソと村国神社の御旅所、拜殿、村国古墳公園が一直線上にあり、共に祭神は天火明命・村国男依である。また、社殿の最古の棟札（天正十二年八月）のうちの一つには、奉勸請南宮大明神村国宮とあり、村国の文字が見られる。惣六は村国氏関連の古墳の一つを金細塚古墳と考え、その線上への遷座ではと思いを巡らすのである。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



忠次のもと伝えられる甲冑（個人所蔵）



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑧ 伊木清兵衛 忠次と藤吉郎



眺めが寝仏に似ていると小仏山とも呼ばれる伊木山の頂には戦国時代には城が築かれていて城主は小伊木の村長（むらおき）だった。香川長兵衛のちの伊木清兵衛忠次。長兵衛は帆掛船を油商人生駒屋に提供して利益をあげ川並衆の豪族となった。当時木曾川の統治者は川並衆と呼ばれ、蜂須賀小六ほかの武士。藤吉郎と川並衆は豪商生駒屋を介して出会う。墨俣一夜城は藤吉郎と川並衆の協力によるもの。関白秀吉への道程は伊木山城主伊木清兵衛と鶉沼城主大澤次郎左衛門や各務野の川並衆との交わりから始まったとも言える。

天正十二年（一五八四）池田輝政大垣城主となる。筆頭家老職は伊木清兵衛、同十五年秀吉の九州征討に主君とともに参戦。秀吉が以前輝政に清兵衛を父と思えと言ったこともあり信頼の程がつかえる。戦国の世、後に姫路城主となった輝政を支えた功績は偉大。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



旗本徳山陣屋跡（那加西市市場町）

⑪ 徳山氏

中山道鶴沼宿ボランティアガイド



江戸期を通して徳山郷と各務郡（那加、蘇原地域）の領主だった旗本徳山氏の初代は五兵衛即秀である。

則秀は、織田信長・柴田勝家、前田利家らに仕えたが、関ヶ原の戦いでは徳川家康にたいし功績があった。以来、直参旗本として明治維新まで十二代続いた。

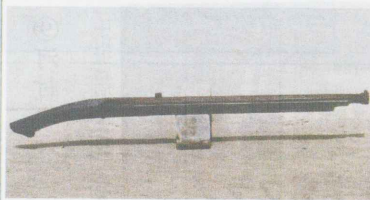
特に三代目の重政は江戸本所築地奉行に就任し本所、深川の都市計画、理め立て、堀割り開削、架橋等を行ない江戸の町造りに活躍し、興味深い。

後に勘定頭（勘定奉行）に昇進している。

また、五代目の秀栄（ひでい）は、火附盗賊改方として、盗賊日本左衛門一味を捕縛するなど、池波正太郎氏の小説「おとこの秘図」の主人公にもなっている。その他にも江戸期最後の当主となった出羽守秀堅（ひでかた）は歩兵奉行として二条城を固め、將軍慶喜の入京に伴う警護役を勤める等、歴史に残る郷士の旧主であり、大変興味深い。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



元前渡坪内家家臣の家に伝わる火縄銃

⑩ 旗本坪内利定

中山道鶴沼宿ボランティアガイド



旗本坪内氏は、安宅の関伝説の富樫左エ門の庶流で、戦国時代始め頼定の時、流浪し尾張に赴き、濃尾の国境木曾川の渡津を根拠に活躍。織田信長から重用され、勢力を伸ばす。信長没後、頼定のひ孫喜太郎は秀吉と不和となり、一時武儀郡金山に閑居。一方、宗家前野長康は、関白秀次と謀反一味として秀吉から切腹を命じられる。

その弟で坪内氏を名乗った喜太郎利定らは徳川家康に迎えられ、上総国の知行を得る。長安切腹後、前野氏に従っていた次男喜兵衛ら三子も関東に赴き、関ヶ原の戦いに鉄砲隊五十人を組織。東軍先鋒（せんぼう）、井伊直正に属し親子五人大きな戦功を挙げ、家康より直々感情を賜り、旗本に取り立てられる。

翌年、濃州松倉を倉お葉栗・各務岡郡内に、禄高（ろくたか）六千五百二十石を拝領。各務郡新加納に陣屋を開設するが、慶長十五年死す。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

③ 田宮如雲と たみやみぞ

市内東部鶉沼地区の高台にあるつじが丘団地とその下に広がる鶉沼西町との斜面に、農業用水路の跡（写真）が残っている。尾張藩の家老の一人田宮如雲（じょうん）が開かせたものである。地元の高老は今でも「たみやみぞ」と呼んでいる。

如雲は美濃の尾張頭を管理する北地総管所（天田宿）の代表を勤めていた。各務野台地を水田にしようと企画していた。明治二年、大安寺の下の河に新池（天安寺池）を築造させた。

水路は羽場地区からさらに西へ約四・五キロを予定した。しかし素掘りのため水漏れが激しく十分な通水がでなかつた。事業は廃藩置県や如雲の死により三年で挫折した。

水路は失敗したが貯水池はそのまま残り、新しい水路によって現在も鶉沼東部地区の農業用水として活躍している。

たみやみぞ
みずなきあとに
暁沐抄華

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

② 伊能忠敬

江戸時代、近郊に優秀な人材を見つけた養子に迎え入れて家督を継がせ、家の繁栄につなげる習慣があつた。伊能忠敬も一七四五年今の千葉県佐原町に生まれ、十七歳で伊能家に養子に入った。

多くの苦難を乗り越え五十歳で家督を譲ると、夢であつた「地球の外周・子午線一度測定のため、幕府測量天文方高橋至時（二）の弟子になる。

五年後、幕府の許可を得ると蝦夷地へ第一

次測量に向かい、三次までで仕上げた地図は大変な驚きとともに要人に認められた。その後、幕府の特命として測量を実施し地域の協力が得られている。特に、第七次測量は、一行十七人が鶉沼宿本陣桜井家に宿泊、幕府特命の「御用」である。本陣桜井家にも、当時の様子を記録に残し、今に伝える古文書があつた。この桜井家古文書は伊能忠敬の測量日記との対比など、昔を知る貴重な史料である。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

(各務野の人物往来～古代から近代～)



中山道鶉沼宿ポランテアガイド

⑮ 武田耕雲齋

鶉沼宿本陣跡

武田耕雲齋が宿泊した中山道鶉沼宿にある本陣跡

幕末の水戸藩では攘夷派と保守派が対立していたが、保守派が勢力を得ると、家老武田耕雲齋は役職を退放された。彼は攘夷派の天狗党に合流し、総大将として攘夷の志を朝廷に訴えるため、千人を超える軍勢で中山道を京都へ向かった。

幕府は諸藩に天狗党追討の命を出したが、対応した諸藩では数度の小競り合いの他は遠巻きに進軍の様子をうかがう程度だったという。元治元年（一八六四）十一月二十九日、天狗党一行は鶉沼宿へ入った。耕雲齋は本陣に宿泊したが、その際に漢詩を揮毫（きまご）して進行方向に多くの軍勢が待ち構えていることを知った。一行は、鶉沼を出ると二十軒から高富・指斐を通り、深い峠を越え、越前国敦賀に入ったところで一橋慶喜を総督とする幕府軍の総攻撃の報に、触れ加賀藩に降伏、翌年二月四日敦賀で斬首（さんしゅ）された。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

(各務野の人物往来～古代から近代～)



中山道鶉沼宿ポランテアガイド

⑭ 播隆上人と各務野

槍ヶ岳開山という大偉業を成した播隆上人。一七八二年、五回も頂上を目指して登山。登山道の開削や直下に鉄鎖をつけるなど、上人にとつては、登山が修行の場であった。

不亂に念仏を唱えながら村人たちに教えを広めていった。訪れた人々には八字番号の印刷したものを手すから授けたという。「南無阿弥陀仏」の六字番号の木版を紙の上から押すと一度に百枚くらい印つたと伝える。大伊木の播隆講、伊木山Ⅱ写真での修行跡、番号碑などを各務野の足跡は多い。錫杖（しやくじょう）を携えての上人の巡行をたどり偉大な行跡をしのびたい。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



鉄砲方櫃(各務原市所蔵)

⑰ 永井肥前守
尚服
中山道鶉沼宿ボランティアガイド



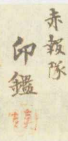
関ヶ原合戦以後、徳川幕府の西の要として築城されたのが岐阜加納城である。城主は奥平、大久保、松平、山田、安藤と替わり、宝暦六年(一七五六)に永井直陳(なおのぶ)が武威固岩槻藩から移封してからは、六代にわたって水井家が加納藩を治めた。六代永井尚服(なおこと)が藩主のころに明治維新を迎える。維新後は官員に視に厳しく尋問を受けるが、事なきを得、藩兵百人を鶉沼・太田・伏見そして御獄宿を守るために差し出した。家来たちも各地で戦果を挙げたようである。そして明治元年(一八六八)、尚服は謹慎が解けると、世の動きに対処するために行政事務を簡易化する藩政の改革を行う。目まぐるしく動く幕末から明治維新の厳しい時代を生きた岐阜加納城藩主永井肥前守尚服の生涯もまた波乱に満ちたものであったにちがいない。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



▲慶応四戊辰正月官軍赤報隊布告



赤報隊印鑑▶

⑱ 赤報隊
せきはうたい
相楽総三
中山道鶉沼宿ボランティアガイド



本陣松井家文書に、「赤報隊印鑑(いんかのみ)」と「慶応四戊辰正月官軍赤報隊布告」がある。赤報隊とは鳥羽伏見の戦いの勝利後綾小路俊実ら二卿を擁立し、結成された「官軍先鋒隊」である。一番隊長に任命された相楽総三は、鎮撫(ちんぶ)総督軍の前方を進み「年貢半減」を掲げ、中山道を東進し勤王誘引をした。ところが、鶉沼宿で帰洛命令が出された。年貢半減が政府にとつて不都合になったことなどである。そこで官軍先鋒隊(きんせうたい)と改名を改め、さらに進軍し、三月一日、下諏訪で鎮撫総督を迎えた。総督は相楽隊を「偽官軍」であるとし、有無を言わせず、幹部八人を斬首した。その後、相楽の孫にあたる木村亀太郎らの苦節の嘆願により、天皇の即位式の前日昭和三年十月十日雪冤(せつえん)され、靖国神社にまつられた。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

百十郎の一場面とポスター



中山道鶴沼宿ボランティアガイド

⑬ 市川百十郎



本名加藤勲作(けんさく)。明治十五年(一八八二)、稲葉郡大島村(現在蘇原大島町)で生まれた。農村歌舞伎が盛んな土地柄で育ったこともあり幼少の時から歌舞伎を好んだ。十五歳で上京し、歌舞伎役者に弟子入りして旅回りをしながら修業時代を過ごした。大正元年(一九一三)、兄弟子でもあった市川八百藏(中車)から市川百十郎の芸名をもらい受けた。その後、精進を続け、舞台では不可能な連続映画で演じ、舞台演劇と組み合わせる新しい手法を用いて人気を博した。「全国川俳優見立大番附」の中で歌頭位置付けられ、歌舞伎界の大立者となった。旅公演で帰郷した時、新境川堤にソメイヨシノの苗を寄贈。その意思を継ぎ、現在は百十郎桜の名で親しまれ、「日本さくら名所百選」に選ばれ、歌舞伎役者市川百十郎とともに市民の誇りである。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶴沼宿ボランティアガイド

⑭ はだか武兵



昔、中山道鶴沼の宿に武兵という若者がいた。年中ふんどし一つの裸で丈夫な男だった。が酒好きの乱暴者で宿を追い出され中山道の駕籠(かご)人足となつて街道を往来して暮らしていた。ある時、木曾の山中で御嶽山に住む仙人と同宿し兄弟の縁を結び、疫病退散の秘伝を授かった。その後、どんな重病人でも武兵が行くとたちまちに治ると評判になり、街道の名物男になった。ある時参勤交代でさる宿場に泊まった大名の姫様が熱病にかかり八万手を尽くしたが病は重くなるばかり。うわさを聞いた家来が武兵を招き入れたところ、一口で本復したという。殿様は、たいそう喜んで褒美を与えようとしたが武兵は「私は己の裸の裸男、何にもありません」と断つた。現在中津川市に「はだか武兵の碑」が建てられており健康を願う人たちの参拝が絶えない。果たして実在の人物か？天保時代の話である。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランテイアガイド

②1 長塚 節

浅茅生の
各務が原は
群れに刈る
林草干草
真熊手にかく
〔山田寺門前市民公園〕

木曾川の
すぎにし舟を
追ひがえに

松の落葉を

踏みつゝそ来し
一少存自然の家前庭

正岡子規の門人となり、テアララギの刊に携わった。短歌散文、小説と写実主義

彼をしのんで、冒頭の歌碑を訪れてみてはいかがだろうか。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランテイアガイド

②0 福沢 桃介

電力王・桃介と木曾川

電力王と呼ばれた桃介は、日本の夜明け、開国と近代化を目指す明治元年に岩崎家の二男として誕生。長じて慶応義塾で福沢諭吉に見込まれ養子入籍、米國留学。その後、諭吉の次女と結婚した。留学の地で、これらの電気の重要性を確信。水速、水量において木曾川は水力発電に最適な条件を持つ。おり、桃介は中部の宝は水力と言った。
賤母発電所を始めに七方所の発電所を建設

中でも大井発電所は日本初のダム式発電所であった。工事は困難を極め、また関東大震災によって資金難にも陥った。その困難を共に受け止めたのは川上貞吉奴であった。
木曾川は、入にとつて特別で思いの強い場所である。昭和三年、実業界を引退。同八年鶉沼宝積寺町に桃光院貞照寺を貞奴が開創する。寺の開基者には福沢桃介、川上貞吉とある。その頃には体調を崩し、十三年、七十七歳で死去

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

②③ 吉田 松陰

幕末、尊攘派の志士・吉田松陰は文政十三年（一八三〇）、長州萩の下級武士杉家に生まれ、後に吉田家の養子となった。十一歳の時、藩主毛利敬親の前で「武教全書」を講義して才能を認められ、藩校師範や海防掛を歴任、また各地を遊学し兵学や海防を学んだ。二十二歳の時、東北遊学のために脱藩し、松陰は藩士の身分を失うが、およそ一年の謹慎を経て藩の許可を得、江戸遊学の旅に出る。

その時の記録「癸丑遊歴日録」には、鶉沼からうとう坂を上ることろ、太田川並置所の役人福寄某と出会い、対岸から大山城を望み岩屋観音の碑文を見て作者のお国自慢をからかつたなどの記述がある。この旅の後、浦賀に米航した米國艦隊を目の当たりにした松陰は、西洋事情を知るため密航を企てるが失敗した。安政五年（二八五八）老中暗殺を企てた罪で投獄され、翌年江戸で処刑された。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

②② 大谷 刑部 吉継

を覚悟しつつ三成の西軍に組した刑部は小早川秀秋の裏切りで滅ぼされる結果となった。刑部と三成は一歳違いで若い時から秀吉の供回りとして忍城攻め、小田原の北条攻め、朝鮮出兵などで数々の戦果を挙げた。

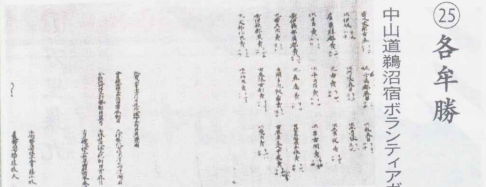
刑部は関ヶ原当時重篤なハンセン病に冒され興（こし）に乗り自軍を指揮したが善戦かなわず討ち取られた。側近の湯浅五助に、絶対に敵に分からぬよう

命し死出の旅路に赴いた。刑部は越前敦賀城主として城下の民を第一義とした施策に努め、領民の人氣も高かったと伝えられている。

鶉沼の古刹（こまつ）大安寺にはいさかにも歴史を感じさせる刑部の墓標が残されており、関ヶ原戦で生き残った家来たちがこの地に先祖代々の生を得たものと思われる。また刑部は人氣武将のコンテスタに毎年上位にランクされている。

訪ねてみよう中山道鵜沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



御野國各牟郡中里戸籍(A断簡)
宮内庁正倉院事務所所蔵

②⑤ 各牟勝

中山道鵜沼宿ボランティアガイド

東大寺の正倉院に勅封が残った文書の一つが大正二年(七〇二)の御野國各牟郡中里戸籍である。戸籍などを記した公文書は一定期間が過ぎると払い下げられ、東大寺では写経をするための真紙として再利用されたものである。各牟郡中里は現在の那加西市場の辺りと考えられている。

戸籍の最後の部分に少領務正七位上各牟勝小枚すくろおひら二と署名がある。少領と

訪ねてみよう中山道鵜沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



②④ 鏡右衛門尉久綱

中山道鵜沼宿ボランティアガイド

承久の乱(一二三二)での戦場は、尾張と美濃の国境で、木曾川沿いの摩免戸(前渡)で激戦となった。しかし合戦前夜のうちに上流の大井戸の渡して朝廷軍が大敗したと聞くや、摩免戸の朝廷軍は矢を放つこともなく京都へと逃げ帰ってしまったと「吾妻鏡」に記されている。ところが、美濃の侍大将鏡右衛門尉久綱だけはこの場所にとどまり、その姓名を旗に書き高い岸に立てた。「臆病の

能登守藤原秀康と二緒の陣にいたために、思い通りの合戦をとげることもなく敗れてしまった。後梅(の上おなし)と叫んで自殺したと伝えられている。今、前渡の渡しを望む矢熊山に承久の乱の供養塔が立てられ、毎年六月には、供養が地元で行われている。多くの死者の中に鏡右衛門尉も共に祭られている。後世に語り継ぎたい郷土の人物である。※来年度も「各務野の人物往来」は続きます。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

田空肖像画(千光寺蔵)



②7 田空さんと 各務原

中山道鶴沼宿ボランティアガイド

田空上人は、江戸時代日本全国を遊行し、その生涯の中で十二万體もの仏像を彫つたと言われている。仏像が北は北海道から西は、近畿地方まで広く現在に残っている。各務原市内にも三體が現存している。どこで、どうやって制作したのかは定かでないし、文献も存在しない。生まれた羽島内には、六十体あまりが保存されている。

田空上人の生涯は、今の羽島市で寛永九年(一六三二)に生まれた

と伝えられている。二十三歳で出家修行を重ねた。

上人の彫つた仏像は、田空仏と呼ばれて、庶民の中で生き続けている。その表情は、慈愛に満ち溢れている。上人は関市や美濃太田にも仏像を多く残しており、修行の跡もある。

昨今、田空上人は田空さんと呼ばれて、庶民の心を掴んでいる。

田空上人は元禄八年(一六九五)関市弥勒寺近くの長良河畔で入定。六十四歳であった。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

②6 万里集九

中山道鶴沼宿ボランティアガイド



土師器皿(大型は京都タイプ)

万里集九は、一四二八年に近江国に生まれ、京都の相国寺で修行を積んだ禅僧である。同時に身につけた漢詩文の学芸では、抜きん出た才能を発揮した。

一四六七年には京都市で応仁の乱が起き、多くの文学僧が戦乱を逃れるため地方へ拡散した。集九も龍門寺(七室、禪源寺)福沢などを経て承国寺(鶴沼)を訪れ、俗人に返った。

集九は、鶴沼に定住することを決意し、居士を兼ねた「梅花無尽蔵」を承国寺に近い清水溪の近くに建て、積極的な五山文学の活動を続けた。

集九の詩文は、江城主太田道灌の招請を受けるほど秀逸を極めた。集九は、一四八五年に江戸城へ赴任したが、道灌の暗殺により鶴沼へ舞い戻った。

承国寺の跡地からは、多量の土師器皿(もてなし)に使用する土器が出土している。当時集九を囲んで盛大な宴が行われていたことを想像させる。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



猿尾堤

②9 猿尾堤と亀姫

中山道鶴沼宿ボランティアガイド

木曾の流れは沿線の住民に大きな恩恵を運んできたが、時には大きな災害をもたらしてきた。

信昌と亀姫

特に江戸時代に入ってから尾張の圧力により築堤も思うに任せず、災害は美濃側に集中した。そんな中、猿の尾のように川の中央下流に向かって延び水勢を弱める「猿尾堤」の存在は大きかった。前渡西門に残る猿尾堤は延長二八〇尺に及ぶ大規模なもので、「亀姫堤」とも呼ばれるが、

これは築堤に大きな力を費した加納城の亀姫に由来する。亀姫は徳川家康の娘であり、慶長六年、大奥平信昌とともに加納城に入り絶大な権力で化粧田三千石（個人の財源）が与えられていた。相当のじゃれや馬で周囲から疎まれていたようだが前渡の人々にとっては恩人である。今、猿尾堤周辺は浄水公園となり花と緑の楽園となっているが、その陰にはこうした先人らの苦労があった。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



②8 山岡鉄太郎

中山道鶴沼宿ボランティアガイド

天保七年（一八三六）旗本小野朝右衛門の子として江戸で生まれ、飛騨郡代となった父とともに弘化二年（九歳）から七年間高山で幼少期を過ごした。

劍・禪・書の達人で、号を鉄舟と称し、勝海舟、高橋泥舟とともに幕末の三舟の一人である。江戸無血開城を成功させた勝と西郷隆盛との会談はあまりにも有名だが、それに先立ち西郷と会話し基本条件を整えたのは鉄舟その人である。

維新後は、静岡藩権

大参事などを歴任した後侍従となった。明治

天皇の信頼も厚く子爵にも叙せられている。

その鉄舟だが、文久三年浪士隊の取締役として、將軍家度の先供での上洛・下向の際鶴沼宿を訪れた。二月十九日に武藤嘉左衛門家で昼食、三月十六日に坂井半之右衛門家で宿泊とある。またその十八年前、父の高山赴任に同行したであろう少年鉄太郎の中山道を行く姿がしのばれる。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

③1 春日局

本名は、齊藤福父。居「ちつきよ」する。育藤利三は、美濃國の齊藤氏の一族で、明智光秀の重臣。母・安は稲葉良通の娘、十七歳で稲葉正成の後妻となる。夫・正成は、秀吉の命により小早川秀秋の家臣となる。

関ヶ原合戦時、小早川を東軍に寝返らせる事に成功するも、秀秋と対立したため、致仕を決議、生國の美濃に戻った。末弟が修行する汾陽寺に近い谷口郷濃国蘇原郷熊田村に塾

野望を胸に秘め、したたかな行動力と冷徹な状況判断により、江戸城大奥に特別な女性の権勢社会を確立した。

春日局とは朝廷から賜わった称号である。郷土が誇れる一人といえる。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

③0 長縄八左衛門

国指定重要有形民俗文化財各務の舞台「稲国座」は、市内各務地区村国神社の境内にある。この村国座誕生の功労者が各務村の庄屋を勤めていた長縄八左衛門である。

江戸時代末期村内で芝居小屋の建設計画が持ち上がった。当時の各務村は幕府領であったため、村内の木を切るためには幕府の許可が必要になった。

そこで八左衛門は慶応二年（一八六六）江戸へ向かったが、帰路

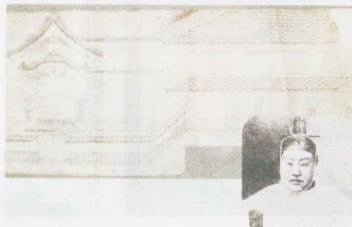
静岡で志平はのまま客死した。加えて幕末の混乱もあり建設計画は一時中断した。しかし八左衛門の遺志は村人に受け継がれ、世の中が落ち着いてきた明治六年に着工、同十年八二に完成した。

その後平成の大修理などを経て、毎年十月には地元小学生による歌舞伎の上演など、八左衛門の功績は現在に至るまで続いている。

先人の遺せし舞台に
蝉しくれ

訪ねてみよう中山道鶺沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》



③③ 堀田正睦と鶺沼宿

中山道鶺沼宿ボランティアガイド

安政五年（一八五〇）四月八日、老中堀田備中守正睦（まさよし）は鶺沼宿に泊まる。ハリスとの日米修好通商条約締結に対する朝廷の勅許を得るため、二月五日の上京以来、実に二月月に及ぶ工作も実らず失意のうち、江戸へ帰ることになるのである。その後この条約が大老井伊直弼によって勅許のないまま独断で締結されたことに比べ、いかにも正睦の実直な人柄が彷彿（ほうぼう）される。

將軍家定にこし入りした篤姫の名をはばかり、初名正房を改名するあたりにもその気配りがうかがわれる。しかし、老中直座として家定の信任の厚かった正睦も將軍継嗣問題で將軍の意図を読み切れなかったこともあり失脚する。傷心の正睦が本陣桜井家に入ったこの日鶺沼宿は、ともに工作にあたった川路聖謨（としあきら）らが入宿したことなど本陣以外に三十四軒が下宿として受け入れたという。

訪ねてみよう中山道鶺沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》



③② 岡田只治

中山道鶺沼宿ボランティアガイド

岡田只治は一八五〇年、長良川・今川・津保川の三川に囲まれた保戸島戸田村の庄屋の家に生まれる。

河川は大きな恩恵をもたらす一方、度々洪水の被害を引き起こすことを少年時代に体験。自分の村を水害から守るために日夜考えた結果、将棋形堤防や控え堤防を築く方法で愛地用水を完成させ、さらに総延長二十余の各務用水という大土木工事を成し遂げる。あと

一つ気掛かりなのが、洪水時でも川留めにならず安全に渡る渡船を造ることだった。

ある時、自宅前の用水路に木の枝から蜘蛛の糸に絡んだ枯葉が一枚水面上を滑って行きつ戻りつしているのを見てひらめいた。ついに一九〇〇年川の兩岸に柱を立て、鉄線と滑車を使った「岡田式渡船装置」を考案。前渡の渡しを含む全国六十余カ所で採用されるが、一四年六十五歳で死去する。

訪ねてみよう中山道鵜沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鵜沼宿ボランティアガイド

35 御石屋 縣半右衛門

鵜沼の縣氏は、記録によれば、忠正の兄山本忠治が元和元年（一六一五）大阪夏の陣で討ち死にしたため、弟の忠正、佐右衛門が、縣と改姓しており、縣氏の初代と言える。明暦二年（一六五〇）に縣佐衛門は和泉国日根村（現大阪府）から鵜沼村に移って来て石工を営んだが、享保のころ（一七二六～三六）縣家は犬山城の専属石工となって坂下中切に居住し鵜沼西町に石切場を持っていた。

硬質砂岩の鵜沼石は加工が難しいが風化にくい特徴があり、墓石・石橋などに加工、販売されていた。文政十年（一八二七）御普請方御役所へ出した書類に石屋半右衛門の名がある。現在半右衛門の名がある作品は随所に見受けられ、岐阜市東別院の井戸棧、江南市前飛保曼陀羅寺の宮前型石灯籠などのほか、各務おかせ町の薬王院の宝篋印塔台座に「天山御用石工縣半右衛門橘正」とある。

訪ねてみよう中山道鵜沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鵜沼宿ボランティアガイド

34 源重之

平安時代後期に白河天皇の勅命で編さんされた『後拾遺和歌集』の中に次の和歌が収録されている。

東の方へまかりけるに
うるまといふ所に
東路に

二三をつるまといふことは
行きかふ人の
あればなりけり

作者の源重之（生年未詳～一〇〇〇年頃）は平安時代中期の歌人で、清和天皇のひ孫に

当たる。相模権守など地方の官職を歴任したのち、九九五年（長徳元年）以後は陸奥に下つて同地で没したといふ。三十六歌仙に名を連ね、百人一首にも彼の和歌がある。彼の歌には旅の歌や不遇を嘆くものが多い。

冒頭の和歌が実際に鵜沼で詠んだものか不明である。しかし東国へ向かう途中にある「うるま」という地が、人が多く行きかうにぎやかな土地柄であったと想像するに難くない。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



ねずみ小僧次郎吉の碑

③7 鼠小僧次郎吉

中山道鶉沼宿ボランティアガイド

各務野に伝わる伝説に鼠(ねずみ)小僧次郎吉の話がある。「いろは屋」という茶屋があった。その主人は旅人を殺害しては金品を奪う悪人であった。そうとは知らず一人の娘が宿泊した。その娘を災難から救ったのが旅の僧であった。後に娘は江戸の奉公先で盗みに入った泥棒を見て驚いた。各務野で自分を助けてくれたあの僧であった。今に伝わる鼠小僧である。鼠小僧次郎吉は実在

した人物である。江戸時代、大名屋敷などに百回以上も盗みに入り、盗んだ金は三千両以上という。天保三年(二八三三)ついに捕らえられ獄門にかけられた。このとき二十六歳であった。盗んだ金を貧乏人にばらまいたことは無かったが、人を傷つけることも無かったといわれている。心優しい泥棒、旅の途中に各務野を通ったのであろう。鼠小僧の碑は倉務原公園付近に建っている。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



③6 弥次郎兵衛と喜多八

中山道鶉沼宿ボランティアガイド

静岡出版
十返舎一九の会
「古文調現代訳」
統藤栗毛 第二部」から

各務野と弥次・喜多 初めて聞いたという読者も多いのではなかろうか。ところが、東海道中膝栗毛の作者十返舎一九は、二人に帰り道は中山道を通らせている。これが木曾街道統藤栗毛である。加納宿に泊まった二人は新加納の立場で大道芸を見たあと各務野を東へ向かった。途中で馬方の口車に乗せられ鶉沼宿までの約束で荷物を預けてしまう。このあと今度は飛脚に声を掛けられ、話の

弾みで負けん気の二人は飛脚と競走することになってしまった。夢中で走っているうちに鶉沼宿を通り過ぎ、十丁(約一キ)ほどというから現在の合戸池辺りまで荷物のことを思い出し、競走をそっちのけで鶉沼宿まで逆戻りする始末に。いやはや相変わらずというか。二人が江戸へ戻ったのは出発してから二十年目だったそうなる。各務野を 駆ける弥次喜多 春がすみ

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



③⑨ 横山忠三郎
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

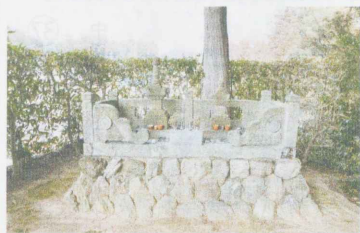
横山忠三郎は嘉永元年（一八四八）尾張藩木曾川奉行横山芳三郎の四男として生まれた。五歳の時に大島村（現蘇原大島町）の横山勘助の養子となり、十七歳から旗本役人として勤めたが、三年後大政奉還で武士の時代が終わり農業に戻った。

明治十三年芥見村有志ほかの各務用水発起者に加わり活動。二十三年三月村長に当選、七月待望の各務用水完成。二十四年四月各務用水関連の全工事が完了した。その用水幹線は全線で二十キロに及び、灌漑（かんがい）受益面積は七百餘畝りになった。

同年十月二八日午前六時三十七分、濃尾大地震発生、この地震は水路の亀裂・破壊など完成間もない各務用水にも大きな打撃を与えた。二十七年、前年に続いて干ばつがあるものの、各務用水区域内は平年作の収穫を挙げその効果が確認された。横山忠三郎の碑は浄念寺境内にある。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



③⑧ 土岐頼益
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

土岐頼益は室町幕府美濃国第六代守護で、守護所革手城（下川手）を居所とした。土岐氏は清和源氏の一流で、土岐郡に土着し十二世紀末頃に、土岐という地名を名字に名をつた。室町幕府創業の功績で、室町時代を通じて土岐氏は歴代守護となり三代頼康のころには、美濃・尾張・伊勢三ヶ国の守護として、幕府に重きをなした。しかし、強大な守護大名を嫌う幕府政策により四代康之は謀反（むほん）

の疑いで除かれ、傍流の西池田の頼忠（頼益の父）が守護となった。頼益の時代には土岐一族の結束が乱れ、守護代斉藤氏の台頭を許すことになった。このころのような時代に頼益は種宗に帰依し、笑常常許を開山として応永二年（二三九五）鶉沼に大安寺を創建した。現在、大安寺には頼益と守護代斉藤利水の供養塔が一緒に並び建ち、鶉沼の町を台高より見下ろしている。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

④1

成瀬

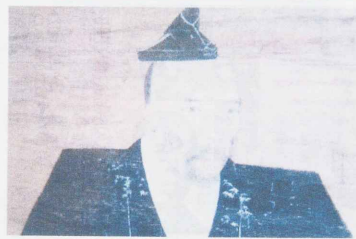
正肥 まきみつ

犬山城は天文六年(二五三七)ころ、織田信康(信長の叔父)に始まったとされる。本能寺の変で信長が倒れた後の激動の中で、元和三年(一六一七)幼少の頃から家康に仕えた尾張徳川家の家臣、成瀬正成が初代の城主となり、慶長十二年(一六〇七)従五位下・軍人正に叙任される。その後九代にわたって成瀬家が城主を務める。最後の城主成瀬正肥が明治維新を迎える。正肥は、安政二年(一

八五〇)に尾張藩の家老成瀬正住の嫡孫となり、同三年に犬山城に入城、翌年正住の死去によって「軍人正」に任ぜられた。正肥時代は幕末維新の混乱期であり、尾張藩と成瀬家にとっては調整が厳しかったようだが、徳川慶勝を助け、長州出兵、朝廷の調整などに積極的に関わる。最終的に太政官政府側に立ち、犬山藩知事が最後の公職で終わる。鶉沼から最も近い城の主であった。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

④0

木下

藤吉郎

木下藤吉郎が織田信長に仕官し、一人前の武將に出世したことはよく知られている。美濃濃原家の騒動に乗じ、信長より美濃鶉沼攻撃の先陣を授かった。永祿七年(一五六四)信長の配下となった松倉城より川並衆を大動員し伊木山城、鶉沼城を攻略した。加納表までの田畑、収穫高まで調査の上、坪内領に機材兵糧を蓄え、瑞龍寺山にひそかに兵を入れ、火炎攻撃に出た。別動隊が稲葉山の硝

煙威爆破を凶に坪内党に加納表を奪取させ、新加納の丘に堅固な基地を構築した。ここから稲葉山城を嚴重に見張らせ、翌永祿十年信長総攻撃の際は水の手より一番乗りで攻略勝利を取めた。手柄を挙げその名を全国に知らしめた短期間の出世の裏には、約束は命に掛けて守る気概があった。藤吉郎が喜んで私財を投じ出世したこの頃から「出世払い」の言葉が流行したという。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》



鶉沼ノ驛從犬山遠望
天保6年(1835)

木曾路名所図会
文化2年(1805)

中山道鶉沼宿ボランティアガイド

④3 湊齋英泉

江戸時代後期の浮世絵師で美人画を得意としているが、名所絵でも知られ「木曾海道六十九次内」全七十一枚中二十四枚を描いている。その一枚に木曾川の左岸、犬山城越しに鶉沼の宿を眺めた「鶉沼ノ驛從犬山遠望」がある。一番の特徴は中央を流れる木曾川をベロ藍(紺書)と呼ばれる西洋の青を取り入れた深みのある色合いになっていること。ベロ藍を使った絵は葛飾北斎が有名だが、英泉が先

という説もある。この作品は三十年ほど前に発行された「木曾路名所図会」(秋里 籬島著)の挿絵「犬山針綱神社」の一部分の構図が類似していることから、英泉は鶉沼を訪れることなく参考にしたという説もある。うとう峠一里塚から三百歩あまり下ると鶉沼宿(犬山城などを一望できる場所がある。もし本当に訪れたのであれば湊齋英泉が見逃すはずがないと思わずにはいられない。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》



④2 川上貞奴

中山道鶉沼宿ボランティアガイド

明治・大正・昭和の激動の中、川上音二郎、福沢桃介らの協力を得て幾多の才能を開花させた川上貞奴は、海外公演で「道成寺」などに出演し、日本の女優第一号と言われている。後半生は、初恋の人、電力王桃介のパートナールとして、三留野に住み、大井ダムなどの建設に貢献している。その後夢であつた絹織物工場、川上絹布を設立して社長となる。

昭和三年桃介の持病が悪化し東京へ帰ると、明治・大正・昭和の激動の中、川上音二郎、福沢桃介らの協力を得て幾多の才能を開花させた川上貞奴は、海外公演で「道成寺」などに出演し、日本の女優第一号と言われている。後半生は、初恋の人、電力王桃介のパートナールとして、三留野に住み、大井ダムなどの建設に貢献している。その後夢であつた絹織物工場、川上絹布を設立して社長となる。

貞照寺本堂裏の靈殿に一对の石造りの羊に守られている。今も当時を懐かしむように大井ダムを見つゝ永遠の眠りにについている。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ポラニアガイド

④5 蓑虫山人 (土岐源吾)

江戸時代末期、安八郡に生まれた蓑(みの)虫山人(土岐源吾)は十四歳のとき思うことがあつて放浪の旅に出る。その後、長崎では日高鉄翁(てつおう)に南画・文人画の手ほどきを受けている。蓑虫山人は日本全国を放浪した画家で、明治初期には前渡東町付近に滞在し、桃林寺には襖絵を、付近の農家なども含めて多くの絵が残されている。

「蓑虫」の由来は本人が絵画道具一式を背

負って歩く姿が蓑虫に似ていることから付けられたという。一説には本人が「蓑虫」と称していたとも伝わっている。

蓑虫山人は自由を好み、旅先では乞われるままに描き、庶民の中に青森では、民族学や考古学にも興味を示し、遺跡の発掘調査や論文を発表するなど多方面で活躍した人物である。

前渡の地に蓑虫山人の足跡があることはあまり知られていない。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



④4 貝原益軒

中山道鶉沼宿ポラニアガイド



貝原益軒は、江戸時代初め頃の本草学者・儒学者である。福岡藩士であったが、二代藩主の怒りに触れ七年間の浪人生活を送った。三代藩主に許され藩医として帰藩し、藩の重責を担うようになった。歴史学者・地理学者でもあった。著書には養生訓がある。この中には、現在にも通じる心身の健康法が述べられている。

それでは益軒はこの地域とどんなつながりがあるのだろうか。益軒は全国を回遊した折に、この地に立ち寄り、次のように述べている。鶉沼の西のはずれより広き野あり。各務野という広き三軍四方、この野に田畑なし。唯青草のみ生ず。

このことから、各務原台地は、江戸初期には酸性の強い黒ぼく土で作物の栽培には適さない荒地であったことが分かる。実際、用水が引かれ各務原台地の開拓が始まったのは明治に入ってからのことである。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

ふく志るも
喰へば喰はせよ

きく乃酒

桃青



47 俳聖 松尾芭蕉
中山道鶉沼宿 ポランテアガイド

元禄時代を代表する文人芭蕉は三回も鶉沼の地を訪れている。最初は貞享二年、野ざらし紀行の途次脇本陣坂井邸に宿泊、二回目は貞享五年七月岐阜で鶉飼を業しんだ後、坂井邸に泊まり、「涙溜の水泡立つや蟬の声」と詠んだとされている。その後天山、鳴海等を回り名古屋に滞在後八月八日ころ鶉沼に戻り再び坂井邸に泊まる。この時求めに応じてクスノキの硅化木（けいしかく）に、「ふく志る旅の生涯を閉じた。」

も喰へば喰はせよきく乃酒 桃青と彫りつけた。この硅化木は長年の風雪に耐え今も脇本陣の前庭に保存されている。桃青は当時の芭蕉の俳号。三日後の十一日鶉沼をたち更級紀行の旅に赴いた。

翌元禄二年三月東北陸へと旅立ち、結びの地大垣までの六百里を弟子曾良とともに五カ月間かけて踏破して書き上げた名著「おくの細道」を残し、元禄七年十一月、旅から旅の生涯を閉じた。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

46 織田信長

中山道鶉沼宿
ポランテアガイド



市役所の東に那加織田町・信長町があり、織田信長公園もある。斎藤軍との戦いの時、信長軍が手力雄神社に火矢を射かけよとすると霧が立ち込め、信長の手足の自由が奪われた。信長が罪を詫わび、手力雄大神に参拝すると霧が晴れ、手足の自由が戻ったという。永禄十年（一五六七）九月、稲葉山城・岐阜城の龍興を追放し、美濃を支配して天下統一を目指した。同年十月、手力雄神社に祭制判

物を出し所領を安堵あらんとした。そして、草むらの各務野下三百町歩、那加地区大半を寄進した。後世発展した那加地区が信長をしのんで町名にしたのである。

永禄八年鶉沼城の大澤氏を従えた時、信長は伊木山に登り伊木清兵衛（後の姫路城の家老）から山芋のトロロ汁のもてなしを受けた。ひようげ踊りをし、気さくに歓談し英気を養って東美濃を攻略したといわれている。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

48

岡田将監

中山道鶉沼宿ボランティアガイド



前渡の猿尾堤



二代継承の名である。初代岡田将監は、岡田善同（よしあつ）であり、永禄元年（二五五八）から寛永八年（一六三二）の人で戦国武将であった。江戸時代初期には、美濃国の旗本・美濃国代官（美濃郡代）を務めた。尾張国生まれで織田信長に任えたとされる。佐々成政に仕官するが、お家改易による浪人を経て、徳川家康に仕える。慶長五年の関ヶ原の戦いでは東軍加藤清正の軍で戦功をあげる。徳川家康の信頼が厚く、治水奉行として御開堤築堤の際の美濃国側の工事を指揮した。二代目岡田将監は、岡田善政（よしまさ）である。慶長十年（一六〇五）から延宝七年（一七二七）の人で、江戸時代初期の美濃国旗本であった。父善同の跡を継ぎ、美濃国代官（後に奉行）となる。

慶安三年（一六五〇）、洪水に伴う堤防築造により猿尾堤を編み出す。両岡田は各務原ゆかりの人物である。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

49

秦氏

中山道鶉沼宿ボランティアガイド



(拓影)



山田寺出土の瓦に刻まれた漢字



秦（はた）氏は、朝鮮半島の南東部から口本へ来た渡来人である。秦王朝の遺民という説もある。記・紀には、応神朝（二七〇）～三〇〇年）に日本へ入植したと記されている。秦氏の本拠地は山背国（京都南部）だが、一族の分佈は日本列島各地に及ぶ。彼らは、農耕を中心に様々な産業の勃興に貢献した。『新撰姓氏録』（八一五年）によると、秦の民は二万八千六百七十人と多勢である。秦氏は、政治の表舞台にこそ登場しないが、その背後では絶大な力を振るった在地的土豪氏族のようである。

古民各務郡では、御野国各牟郡中里大宝貳年戸籍（七〇〇年）の中に「秦人」の名を見ることができ、また、古代山田寺の発掘調査で出土した瓦のなかに、「秦」と読めそうな漢字が認められる。各務郡には他にも各務氏などの渡来人が入植し、先進技術を駆使して活躍をみせた。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

53 多治見修理と 春姫



猿啄(さるはみ)城の三代目(十八年在城)の多治見修理。永祿八年、織田信長東美濃攻略のため、いよいよ猿啄城に兵三千にて迫った。多治見修理は守り切れずと見て家老の林神左右衛門に城を預け、再起を懸けると言い残し、北方より武田領を屈指し落ち延びた。

もともと土岐氏の家臣である上司の寝目をかいて奪い取った城である(下克上)。それでも家老を中心に必死に応戦するが、ついに

蘇原伊吹町周辺には「城屋敷」「東屋倉」「西屋倉」といった字名があり、八幡山城があったことを伝えている。八幡山城は、加佐美山とその山麓を取り巻いて流れる境川を利用した中世の山城であった。今でも加佐美山山頂では、小規模な曲輪や切岸などが確認できる。八幡山城という名称は、かつて加佐美神社を八幡宮と呼んでいたことによる。

永祿のころ、この八幡宮には、人見清蔵が待たれる。

が城主として住んでいたが、斎藤龍興によって城を落とされ滅ぼされたと伝えられている。人見清蔵がどのような人物であったかを伝える史料は見当たらない。ただ、清蔵の子孫が一族と思われる人見清次の書状が、八幡宮(加佐美神社)に納めてあり、そこには文祿三(一五九四年)二月、清次が八幡宮に二十五石分の土地を寄進したとある。新しい史料の発見が待たれる。

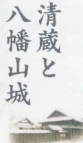
訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

52 人見清蔵と 八幡山城



蘇原伊吹町周辺には「城屋敷」「東屋倉」「西屋倉」といった字名があり、八幡山城があったことを伝えている。八幡山城は、加佐美山とその山麓を取り巻いて流れる境川を利用した中世の山城であった。今でも加佐美山山頂では、小規模な曲輪や切岸などが確認できる。八幡山城という名称は、かつて加佐美神社を八幡宮と呼んでいたことによる。

永祿のころ、この八幡宮には、人見清蔵が待たれる。

が城主として住んでいたが、斎藤龍興によって城を落とされ滅ぼされたと伝えられている。人見清蔵がどのような人物であったかを伝える史料は見当たらない。ただ、清蔵の子孫が一族と思われる人見清次の書状が、八幡宮(加佐美神社)に納めてあり、そこには文祿三(一五九四年)二月、清次が八幡宮に二十五石分の土地を寄進したとある。新しい史料の発見が待たれる。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》

一九〇四～九六
山形県山形市出身



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑤⑤ 土井武夫



不毛の地と言われた各務原台地の航走は、江戸後期の大砲射撃練習場から始まる。日本の近代化に伴い、それは陸軍の砲兵演習場となり、その後、航空基地へと発展していく。

第一次大戦後、日本は飛行機技術の発展に力を注ぎ、中山道をフランス人将校団が往来そこに登場するの土井井だ。東大で学んだ後、ドイツに留学。また協を許さぬ性格で師の厚い信頼を得たそう。第二次大戦では彼の

「飛龍（とりのゆう）」「飛燕（ひえん）」が堀越二郎の「零戦（れいせい）」「雷電」とともに活躍するも日本は敗戦、手塩にかけた設計図は全て目の前で焼却され失職、人生で最も考えさせられた時を過ごしたという。

後年、その英知衰えを知らず再び川崎重工にて陣頭指揮を執り「ほか者」が口癖だった彼はまた、九十歳にしてなお若い女性とダンスを楽しんだ者でもあった。

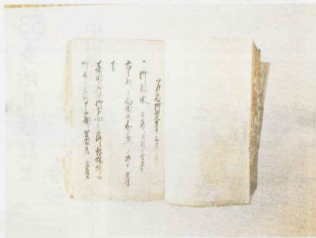
訪ねてみよう中山道鶉沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》

⑤④ 和宮



中山道鶉沼宿ボランティアガイド



御膳水に関する本陣桜井家の文書

和宮は仁孝天皇の第八皇女で明治天皇の叔母である。混乱を極める幕末に公武合体対策の一環として十四代将軍徳川家茂の御台所となった。この背景には幕府と朝廷にさまざまな事情や思惑があったが、結果として実行を見るに至った。

文久元年（一八六一）十月二十日に京都を出発した和宮一行は加納宿での宿泊を経て、二十七日には新加納で小休止。鶉沼宿で昼食休憩を取つていく。

その数カ月前から、見苦しき箇所がないよう宿内の修復や普請、本陣内の修繕などを行う。日用品の仕器（じゆうき）類についても借り受けるなどの準備に奔走している。食材もタイやフナ、マツタケなどを用意し、御膳の水に至っては七月時点で井戸を限定し報告している。

いづれにしても総勢二万五千人ともいわれる行列で、その対応の大変さや混乱の状況をうかがうことができる。

訪ねてみよう中山道鵜沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》



中山道鵜沼宿ボランティアガイド

⑤7 大垣城鉄門と 戸田家

鵜沼宿のほぼ中央に高麗門形式の鉄門がある。この門は、廃藩置県後の明治九年に安積家の所有となり、加納城の門を移築したと伝えられてきた。

平成二十年に市に寄贈され、翌年鵜沼宿再生のためこの地に移築された。その過程で大垣藩大工奉行の名前が記された「墨書」が発見され、大垣藩主戸田家の「九曜紋」の鬼瓦が同藩御用瓦師によるものと判明。その結果、大垣城の城門と断定された。

戦国時代に各務原に館を構えた武將がいた。その名は各務右近将監常久（かかみうこんしやうけんつねひさ）。

この各務氏は、守護土岐氏の執権である斎藤氏の一族で、その居館であった各務城は各務おがせ町の旧字「城之屋敷」にあつたといわれている。

この各務氏は、天文十一年（二五四二）、斎藤道三が守護の土岐頼芸（よりなり）を大桑城（山県市）に攻め、美濃の多くの將

上が道三に味方した中で、土岐氏に味方し戦った。しかし、頼芸方は少なからず大桑城は落ち、頼芸は執田へと逃れた。その後の各務氏は道三のもとに降つたが、弘治二年（五六）、斎藤義龍が父道三と戦つた長良川合戦では、義龍に味方して奮戦したといふ。

現在、この各務氏がとりでや館を構えたといういわれを残すため、土地の人たちが「史跡各務氏一族居城地」といふ石標を建てている。

訪ねてみよう中山道鵜沼宿

《各務野の人物往来～古代から近代～》



村国神社南にある石標
（各務おがせ町）

⑤6 各務右近将監常久

戦国時代に各務原に館を構えた武將がいた。その名は各務右近将監常久（かかみうこんしやうけんつねひさ）。

この各務氏は、守護土岐氏の執権である斎藤氏の一族で、その居館であった各務城は各務おがせ町の旧字「城之屋敷」にあつたといわれている。

この各務氏は、天文十一年（二五四二）、斎藤道三が守護の土岐頼芸（よりなり）を大桑城（山県市）に攻め、美濃の多くの將

上が道三に味方した中で、土岐氏に味方し戦った。しかし、頼芸方は少なからず大桑城は落ち、頼芸は執田へと逃れた。その後の各務氏は道三のもとに降つたが、弘治二年（五六）、斎藤義龍が父道三と戦つた長良川合戦では、義龍に味方して奮戦したといふ。

現在、この各務氏がとりでや館を構えたといういわれを残すため、土地の人たちが「史跡各務氏一族居城地」といふ石標を建てている。

訪ねてみよう中山道鶯沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

岐路安見繪図



中山道鶯沼宿ボランティアガイド

59

おたなはん
大田南畝と

六軒・廿軒

岐阜新聞情報センター提供

享和二年（一八〇二）三月、大田南畝は、支配勘定として一年余り務めた大坂銅座への赴任を終え江戸へ帰る。天明期の文人・狂歌師であり御家人でもある南畝は、十六日間の旅をその年の下支にちなんで「壬戌紀行」として著した。公用で江戸と大坂を往復する時は、東海道を利用するのが普通だが、旅好きの南畝は、銅座での任務を終えた解放感も手伝ってか、帰りは中山道経由を願っていた。

同月二十六日、加納宿を出立した南畝は、金花山を左手に見て、細畑、切通し、新加納を経て各務野に至り、猶も野をわけゆけば松多し。六軒茶屋の村はわびしきさま也。松原を過ぎて左に「百是東尾州領」といへる石表あり。松原をへて廿軒茶屋にいたると述べている。各務野で新田開拓された当時の戸数から称した一方所の茶屋か、今も、地名鉄道の駅名として、残されているのである。

訪ねてみよう中山道鶯沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

進録・徳寺の観音堂Ⅱ中央と仁王門



中山道鶯沼宿ボランティアガイド

58

佐々木吉兵衛

明和五年（一七六八）七月に岐阜で大火があり、多くの犠牲者が出た。吉兵衛はたまたま岐阜の伯父の家でこの大火に遭遇し、自家に伝わる善光寺如来像を奉じて炎の中をくぐり、抜け奇跡的に助かった。吉兵衛は蘇原伊吹村の六町四反を五年の歳月をかけて開墾しているが、大火はその三年目の出来事であった。安永五年（一七六六）から寛政四年（一九二）にかけて、新開の地に堂宇を建立し、大火の中を奇跡的に助けていた善光寺如来のおかげと考え、その像を安置し、大火で焼け死んだ親類縁者の供養と五穀豊穰（ごうじょう）を祈る場とした。堂宇建設途上「加官進録」と記された古銭が出土したので寺名を「加官山進録寺」とした。新開の地は吉兵衛の功績をたたえて、字名を「吉兵衛新田」と呼ばれていたが、各務原市発足時に変わり、現在は「蘇原吉新町」である。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

60 佐良木尚頼

中山道鶉沼宿ボランティアガイド



現在の城田館跡

佐良木尚頼は、第八代美濃国守護である土岐成頼の三男で、佐良木三郎尚頼という。現在的那加に居館を構えていたといわれ、近年那加御屋敷町と改称された所である。佐良木尚頼は、明応三二四九四、五年にかけて展開した美濃版、応仁の乱と位置づけられた船田合戦に登場する。

この合戦は、守護土岐成頼の長子・政房と末子・元頼の家督相続争いで、土岐家臣は二分された。佐良木尚頼は、

は、元頼を擁する石丸利光方に付き、政房を擁する斎藤方と対峙した。斎藤方には尾張の織田と越前の朝倉が、石丸方には伊勢の北畠と近江の六角の応援で城田寺(きたじ)を中心に戦いが進められたが、斎藤方の勝利で終結した。

その後、石丸父子は自害し、元頼は城田館の四面櫓(やぐら)に火を放って自害した。この折、佐良木尚頼は、重臣三十余人とともに殉死した。

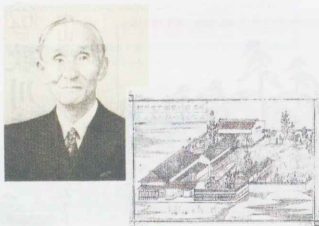
訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

61 郷土の誇り

「小島三郎医学博士」

中山道鶉沼宿ボランティアガイド



小島博士と下中屋村の小島医院

小島三郎博士は、日本の伝染病学防学の第一人者でインフルエンザウイルスの研究や世界保健機関で公衆衛生分野に業績を残し、わが国の医学界に多大な貢献をしました。

小島氏は明治二十一年、川島河田島村区長の岩田家の三男として生まれ、小学校入学とともに英才ぶりを発揮して現岐阜高校へ進学。その後現一橋大学に進むも、親戚の開業医小島家の養子となり、医学に転身。東京大学医学部を卒業しました。

その後、下中屋の養家の医院を継いだ。三十三歳から東京大学教授、国立予防衛生研究所長などを歴任し、腸チフス、パラチフス赤痢、疫病等の伝染病撲滅に生涯をかけた。伝染病研究に取り組む活躍は戦後にまで至り国際的に評価されて、この分野におけるわが国の伝染病専門学者の地位向上に貢献した。昭和三十七年に肺気腫のため、七十四歳の生涯を閉じました。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

伝説の残るおがせ池



⑥3 八百比丘尼
やおびくくに
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

八百比丘尼は、俗に人魚の肉を食べたこと
で八百歳まで生き、各
地を旅したといわれる
伝説上の人物で、古く
は室町時代の文獻にも
登場する。北陸地方を
中心に、全国に八百比
丘尼の伝承が伝わっ
ているが、各務原にも幾
つかの伝承地と昔話か
ある。

平成三年に小浜市が
発行した「伝説資料集
八百比丘尼」の中で、
美濃国各務郡前野の里
の長者の一人娘が施行
の功力により八百歳の
長寿を保ち、後に各務
村に住んだという話と、
伝承地の一つとして蘇
原三柿野町が取り上げ
られている。

また、各務原市史
民俗編では、おがせ
池にまつわる昔話の一
つとして「若狭の八百
比丘尼」という話が取
り上げられている。こ
ちらは、おがせ池の龍
王の元から帰った男が
土産として人魚を持ち
帰り、それを食べた老
婆が若返って神通力を
得、諸国行脚に旅立つ
という話である。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

木曾川街道六十九次内「加納」



⑥2 歌川広重
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

十三歳で定火消同心
職を継ぎ、十五歳の時
歌川豊広に入門。広重
号にて天保三年浮世絵
師として独立した。

翌年に発表した東海
道五十三次で風景画家
としての名声を築き、
以後数々の東海道・江
戸名所シリーズを発表。
花鳥風月の分野でも秀
作を出し続けた。特に
これまで見られなかつ
た大胆な構図と広重フ
ルーと称された鮮やか
な藍色の配色は、ゴッ
ホやモネなどの世界的
な印象派の画家たちに
大きな影響を与えた。

この当地中山道をモチ
ーフとした代表作には、
木曾街道六十九次が挙
げられる。これは風景
画の第一人者広重と美
人画で一世を風びした
溪斎英泉が合作した画
集である。

天保六年（一八三五）
に完成させたこの画集
は全七十一画のうち広
重が四十七を、英泉が
二十四を描いている。
有名浮世絵師二人の合
作の試みとして非常に
珍しく意義深いもので
あった。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

三井山城の絵図と三井山



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

65

三井弥市郎
(三井山城主)

人物像についてはあまり詳しい書籍は残っていないが『尾張葉栗見聞集』には「この城山は高からず、しかれども要害堅固なり」と記されている。城は三重の郭輪を巡らせた本格的な戦国山城である。天文年間美濃国内に内乱が起き、尾張織田信秀(信長の父)は越前朝倉氏と呼応して美濃に攻め込み、三井弥市郎が大桑城に出撃した隙を突き、難無く三井山城を奪い余勢を駆って稲葉山を閉んだ。

一方稲葉山城では斎藤道三が倍を超える敵の軍勢を十分に引き寄せ一瞬の隙を突いて主力全軍を信秀の本陣に突撃させた。あつと言う間に中軍まで打ち破られ本陣も立て直す間もなく敗走した。

織田信康(信秀の弟、犬山城主)以下三十一人以上の戦死者を出し、信秀は尾張へ敗走した。後軍の青年信長も道三の作戦に舌を巻き、今川氏との決戦にこの作戦を使い、天下に名をとどろかせた。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

西入坊(下中屋)の大銀杏と蓮如上人像



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

64

蓮如上人

蓮如(二四一五)九丸は本願寺八世浄土真宗中興の僧として知られる。第七世存如と召し使いの間に生まれ十七歳で得度、宗祖親鸞に帰することを信長に、生涯を本願寺教団の勢力拡張に尽くした。文明年間五十六歳の時、越前に吉崎御坊を建立。このころから多くの門徒衆に手紙を送り、その文集は孫の円如によつてまとめられ五帳八十通に及び「御文章」「お文」等と称し真宗教義の書として

広く親しまれている。「朝には紅顔あつて夕には白骨となれる身なり」。人の世のはかなさを説いたこの一説は、聞く人の心の奥底に響く名文である。

七十六歳の時、西入坊を訪れ自画像を残している。この絵像は毎年四月の例祭に開帳され蓮如祭りと呼ばれ多くの参拝者でにぎわう。本堂南側には蓮如のつえが根付いたといわれるイチヨウの太木が生い茂り、市指定の天然記念物となっている。

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

大安寺川右岸に残る承国寺北西土塁



中山道鶴沼宿ボランティアガイド

⑥7

鈍仲全銳



室町時代、市内鶴沼古市場に美濃の守護土岐持益が創建した承国寺があった。鈍仲全銳は臨濟宗の一派の禅僧であるが、持益に請われて美濃に至り承国寺の開山となった人物である。

寺には応仁の乱の戦火を逃れた文化人たちが集い、全銳を中心とした文学活動も行われ一時は栄えたが、土岐氏の勢力が衰えるとともに廃絶した。

承国寺

残る土塁に

秋時雨

平成八年、各務原市の発掘調査により、承

訪ねてみよう中山道鶴沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

中山道鶴沼宿ボランティアガイド

⑥⑥

竹腰山城守



鶴沼宿にある高札場

中山道鶴沼宿の街道と坂祝バイパスの交差点北東角に高札場が復元されている。

高札場とは江戸時代 に法令や禁令を知らせる板（高札）を数枚掲げた場所。当鶴沼宿は尾張徳川家の領地なので二人の家老、成瀬隼人正と竹腰山城守が奉行人として高札に名を連ねている。

竹腰家の初代は正信といい、父親は彼が母のおなかにあるころ離縁して、母はその後、家康の側室となり九男

義直を生んだ。従って、正信は尾張藩祖徳川義直の異父兄に当たる。この縁で義直が尾張名古屋六十三万石余に封ぜられると、美濃国安八郡今尾村（現海津市平田町今尾）などにて三万石を与えられ、成瀬とともに附家老として重きをなし、明治維新まで十代を数えた。

鶴沼宿の高札には「竹腰兵部少輔」とあり、十代の内七人は山城守を名乗っているのに珍しい名乗りだなどいつも思っている。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

武藤嘉門の生家



武藤嘉門伝(岡戸武平著) 中部経済新聞社刊から

中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑥9

若き日の

武藤嘉門

武藤嘉門は、戦後岐阜県の民選初代知事となった人である。

嘉門は明治三年(一八七〇)、山県郡千疋村現関市の辻家で生まれ、名は貞次郎。子どもころから何事によらず負けず嫌いで、学問でも人より優れていた。

同二十二年(八九)、岐阜中学卒業。東京法学院入学。同二十四年(九一)の濃尾震災の時、帰省。父の自慢の家は倒壊を免れていた。休む間もなく近隣の復旧

に尽力、一段落して上京の準備中、父が鶉沼の酒造業武藤家への養子の話を持ち出した。

武藤家では長男の九一亡き後、後継者に悩んでおり、辻家とは縁戚でもあり、再三養子の話が来っていたところ、一晩考えた上、承諾

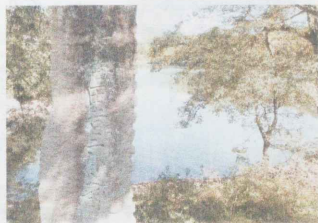
籍の際、名を「嘉門」と改め、名古屋の呉服屋刈谷喜助の次女よねと結婚。嘉門二十歳

よね十五歳、養父嘉左衛門の下、酒造り時に百姓の手伝いもした。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

合戸池の南岸に建つ梅田吉三郎碑



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑥8

梅田吉三郎

梅田吉三郎は、合戸池(かつこいけ)の上流を開発し水田を開いた人である。合戸池は、JR鶉沼駅から北へ一キロほど坂道を登った所にある古いため池である。

明治二十四年の濃尾大震災で決壊し、下流の田畑を押し流す大被害が出た。県費をもって同二十五年に再築堤された。これがほぼ今の堤の位置であるが、以前はもつと北に堤があり、池も少し小さかった。

中山道は、この合戸池の堤を通って東に向かい、一里塚からうとう峠へと至っている。鶉沼東町の梅田吉三郎は、十六歳の頃に合戸池修築の人足に出た。

(明治二十五年)その後池の上流の開発を発起し、東町に其有林の谷(中山道北側)に水田を開いて、犬山市の栗栖村の人たちにも小作をさせた。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿

〈各務野の人物往来～古代から近代～〉

⑦

四月から
新シリーズ



中山道鶉沼宿ポランティアガイド

『訪ねてみよう中山道
鶉沼宿 第二シリーズ
各務野の人物往来』古
代から近代へは前回
で終了しました。

三年間七十一回にお
たりご紹介してきた人
物たちはいかがでした
か。ご愛読ありがとうございます。

さて、このあと四月
からは『中山道六拾九
次の旅』江戸から京へ
と題して、江戸は
日本橋から終点京の三
条大橋を目指して中山
道を上ります。

旅は私たちポランテ
先人の
足跡訪ね
春を行く

に努めます。
なお、掲載する写真
は江戸時代後期の画
家・歌川広重と溪斎英
泉が分担して描いた
を予定しています。

執筆者（順不同・敬称略）

足立 勘二（ポランティアガイド）
池戸 憲二（ ）
板鼻 清治（ ）
今野多美子（ ）
樽谷 博（ ）
片岡 稔（ ）
可児 幸彦（ ）
栗田 訓行（ ）
黒内 昭（ ）
黒柳 章（ ）
後藤 俊之（ ）
近藤 章（ ）
清水 浩之（ ）
高橋 雅子（ ）
坪内 智子（ ）
鳥居 節子（ ）

野村 和子（ポランティアガイド）
橋本 玲子（ ）
福島 秀士（ ）
堀田 隆久（ ）
松尾 朋和（ ）
宮脇 實也（ ）
吉村 京子（ ）
西村 敏行（元）
水野 武男（元）
平林 由雄（元）
古川 勝行（元）
李 智恵（元）
田中 稔（元）
中島 晴美（元）
西村 勝広（元）
引地 歩（元）

歴史民俗資料館

